

# 本を選ぶ

NO.428 2021年(令和3年)1月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん> Ruby
- 「やりたいこと」への熱量につき動かされて
- 日本語の研究&エッセイの集大成
- 図書館を離れて(第50回)
- ワイトゲンシュタインという人

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## Ruby

ビール会社がコンビニチェーンと共同開発した新商品の缶ビールを、デザインの英語表記に誤りがあったとして新年早々発売を中止した。LAGERとするはずだったがLAGARになっていたらしい。ビールの種類を表す内容だけにやむを得ない決定だったが、廃棄は勿体ない、フードロスになるというSNSなどの声に押されて、2月から発売すると発表しなおした。それを伝える新聞の見出しには<誤植「LAGAR」発売へ>とある。

新聞の朝刊には週に何回か新聞社自身の記事訂正の囲み記事が出る。訂正すべき理由も添えられていて、取材した記者の勘違いでした、確認を怠りました、聞き違えました、表記上の誤記、など様々だ。毎度扱いは小さく目立たないけれど、時には改めて1本の記事として掲載すべき事例もあるから、読者としては見落とせない。

つい最近「伯刺西爾」と表記すべきところ「伯刺西爾」としてしまった、との訂正が出た。見づらいが「刺」が正しく「刺」が誤り。これは一般的にはやはり誤植の例だ。正確には活版(活字組版)印刷ではないので、つまり植字しているのではないから「誤植」ではなく誤字。新聞は記事に関してはかつてのように誤植とは言わず、訂正として

扱う。だが、冒頭の例と同様に慣例的に誤植という印刷用語は現在も各種の印刷物において頻繁に使われている。かつて活版印刷では印刷された校正紙の段階で誤字が見つければ赤字が入り、活字を抜き替えて植字し直していた。

活版印刷の印刷所の工場内では工程毎に職域がいくつかに分かれていた。客から預かった原稿に従って文字活字を1字ずつ拾って来る文選工、集められた文字活字一揃いをもとに原稿や組み付けの指示通りに版を組み上げていく植字工、足りなくなった様々な活字を鉛合金で鑄込む鑄造工、そうやって組み上がった原版から紙に刷り出す印刷工などだ。

約物と呼ばれる記述記号類、すなわち句点・読点、各種の括弧、感嘆符、疑問符、数学記号、論理記号などの扱いについては文選の仕事ではなく、やはり植字工の領域。頁を組み上げる際、都度拾っていく。また指定された行間の隙間を確保するために入れ込むインテルや字と字の間を埋めるクワタという詰め物を手際よくあしらうのも植字工の腕の見せ所。インテルは金属や木製の棒状、ないしは薄い板状で、余白を埋めるためにも使われる。最後はたこ糸で結束してゲラ箱に移動する。

ではルビと呼ばれる振り仮名についてはどうか。行間を利用して仮名を振る作業なので、初校段階で植字工がやっておかないと厄介だ。実際には仮名を振るべき文字のところは、インテルを切って小さな活字を挿入する作業となり、さらに行間をきちんと整え直さなくてはならない。(埜村 太郎)

# 「やりたいこと」への熱量につき動かされて

横山 豊子

2019年、小学5年の冬、ケイタ君が母親のヨーコさんと東京・本郷の出版社にやってきた。

元小・中学校校長で「弁当の日」提唱者の竹下和男さんは長野での講演を終えた会場で出会ったヨーコさんの「小学生の息子が、大好きなフランス料理をもっと学びたくてフランスへ修業に行くことを決めました」という話に心を動かされた。

「子どもが自分でつくる “ 弁当の日 ”」の取組みを通し、「待つ」子育ての大切さについて親たちと語らってきた竹下さんの思いと重なるケイタ君のチャレンジを本にまとめる企画はここから始まった。

この本を書いたケイタ君は、2歳の時に両親と長野県上伊那地方の冬期は気温がマイナス10度を超えるという山あいの村に越してきた。

農業をやりながら暮らしていける場所を探していたお父さんと英語の教師をしているお母さんが「ここなら、のびのびと子育てができる」と思って決めたという。いちばん近いコンビニまでは自転車でも1時間20分。山に囲まれていてとても空気がきれい。

学校へはバスで通っている。同級生は5人で、放課後、バスの時間まで学校の友だちと遊んで、家に帰ったら猫と犬と、鶏もいるし、シカやイノシシ、タヌキにリス、カモシカやイタチなどの野生動物にも会える。

「小さいとき、ぼくはなんでもまねをしたがる子で、1歳になるかならないころから台所でお母さんのやるのを見て、包丁で皮をむいたり、お皿を洗ったりしていたらしい」「本当にあぶなくて何度も指を切ったけど、それでもやりたがったから、お母さんはやめさせなかった」「それで、ぼくは料理をつくるのが好きになったんだろうね」とケイタ君。

農業が忙しい春から秋にかけては、ボランティアの人たちを日本だけでなく世界中から受け入れている。これまでに5大陸から130人以上の人が来てく

れて、いっしょに農作業したり、毎日ご飯をいっしょに食べたり片づけたり、「家族みたい」に過ごしていた。中には料理を作ってくれる人もいるから、ケイタ君のノートは世界各国の料理メモで埋まっていた。

一番長い滞在記録のフランス人シェフ、ジェレミーは日本の材料を使ってフランス料理をいろいろ作ってくれた。どれもすごくおいしくて、フランス料理やフランスのお菓子づくりをやってみたくなった。「家族の誕生日ケーキは、たいていぼくが作っているよ」。



『料理大好き小学生がフランスの台所で教わったこと』ケイタ著／182×174mm／128頁／本体1,400円／2020年／自然食通信社刊

小学5年生の夏には鍛冶屋さんを手ほどきしてもらいながら自分用の包丁まで作るほどの「料理大好きっ子」に育ったケイタ君は、大好きなフランス料理やお菓子をもっと作れるようになりたくて、貯めていた小遣いとクラウドファンディングで不足分を足し、2週間学校を休んでフランスへ行こうと決めた。

「料理修業にフランスへ行くから」といきなり伝えられた同級生たちは、「なんで!」「2週間も、どうして!」と、みんなびっくり。「ひとりでも行きたかったのに」お母さんがついてきたのは、ふろくらしい。

2020年1月末、伊那から電車をいくつも乗り継ぎ、成田空港を発っておよそ50時間。フランス・ドゴール空港には、農業ボランティアで滞在して親しくなった友人のひとり、パオロが迎えに来てくれていた。安心したからか熱を出して2日間フラフラになったケイタ君。パオロのお母さんが作ってくれた胃腸の疲れや風邪にもいいと言う野菜たっぷりの薬膳料理「農民のスープ」に元気をもらい、体調もどうやら回復。

首都パリの第一印象をケイタ君、「ゴミと落書きとペットのフン」と表現。ゴミで一番多いのはタバ

コの吸殻。フンはいたるところに落ちていて、ぼんやりしていると踏んづけそう。

他の農業ボランティア、アナイスとギョウムたちが暮らすシャンベリーやジェレミーの故郷トゥールーズを訪ねる途中で立ち寄った都市リヨンでは、ホームレスの人たちがたくさんいるのに驚いたケイタ君。「ぼくも子連れの人に2ユーロ入れたけど、お金じゃなくて、ぼくは仕事をあげたいと思った」。

フランス東部のアルプス山麓シャンベリーやトゥールーズでは伝統料理や、地元の食材をたっぷり使った家庭料理のおいしさにも出会い、「豪華！」って思っていたフランス料理のイメージが大きく変わった。8ヵ月かけてアジアを回る途中でボランティアに来てくれたアナイスとギョウムは、シャンベリーの田舎で古い農家の家に入れて子どもたちと暮らしている。

牧畜が盛んなシャンベリーでは牛乳やバター、チーズが豊富で、チーズを溶かしてハムやゆでたジャガイモなどといっしょに食べるラクレットの豪華さに目を見張り、「すごくおいしかった」。「ジャガイモのグラタンを作るときも、たっぷりの牛乳で煮てからオープンに入れるんだ」。

料理のレパートリーだけでなく、友人たちが、環境問題に取り組んでいたり、レストランの食材を調達する際に地元のものを優先して買うようにしていたし、インスタントではなく丁寧な調理を心がけたりしているのを知って、伊那で暮らす両親も野菜や米を作るのに化学肥料や農薬を使わないし、食材を求めるときは、まず地元の店で買って、無いときはスーパーまで買いに行っているのといっしょだなと思うところもあった。

またホテルに泊まった翌朝、黄色いジャケットを着た大勢の街の人たちのデモ行進にも出くわし、年金制度や労働条件を悪くしようとしている政治家への抗議と聞いて、こんなにもみんな怒っているんだとメモに書き込んでいる。

フランス語もほとんど分からず、マルシェやスーパーでの買い物や乗り物のチケット購入、乗り換えなど初めての体験ばかりでも、自分の住む地域や国と共通するところも、違うところもあることなど、感覚を全開にして首都パリから、地方の都市や町も

めぐって、ケイタくんはフランス料理修業2週間の旅を終え、帰国の途に。

クラウドファンディングで資金を出してくれた人たちへの報告をすませて、一区切りついた後は、フランスで教わった料理をもっとおいしくと試行錯誤しつつ、次なる「大好きなこと」にまっしぐら！

印刷入稿直前の10月中旬に届いた手書きのくあとがきには「いま打ちこんでいることは、世界の名作をほとんど読むこと。一番好きな本はジュール・ヴェルヌの『二年間の休暇』です」とあった。



写真左：小さな頃から、畑の仕事が遊びだった

写真右：材木を刻む

本が完成する前に6年生になったケイタ君のもう一つの関心事は、夏休みを使って第2人と共同で遊び場としての家づくり。大工さんのアドバイスを受けながら、迫りくる雪の季節を前に10月には棟上げも終えた。しっかり仕事をする手になっているケイタ君のノコギリを自在に使う姿が陽光にまぶしい。

ケイタ君だけでなく、弟たちにも、やりたいということではできるだけやらせてきたという母親ヨコさんは本書に寄せたコラムで、まだ言葉も覚束ない小さい頃から、『野菜を包丁で切りたい』と身振りで必死に表現するケイタの訴えを却下することができなかった。初めて包丁を手にしたケイタは、私の手や指の動きを見事に再現し、すでに料理の手順も覚えていましたし『子どもって意外とできるんだ』と驚かされた瞬間でした」と回想している。

「育てたのか？」「育ったのか？」——

本書はケイタ君がフランスで教わったフランス料理やお菓子の写真とレシピがたくさん入っている料理武者修業の本であると同時に、「学び」と「教育」の間にあるものについて深考を促すものとなるのではと幾度も足を止めながらの編集作業となった。

(よこやま とよこ：自然食通信社)

# 日本語の研究&エッセイの集大成

— 『山口仲美著作集』 全8巻 —

古谷 千晶

『山口仲美著作集』(全8巻)が完結した。古典の文体やコミュニケーション研究、オノマトペの歴史研究の第一人者である著者の長年の研究の集大成である。2017年の秋に始まったこの企画は、2018年に第一巻を刊行した。そして新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言をものともせず、2020年9月に第八巻の刊行と当初の予定どおりに刊行された。各巻の構成は以下のとおり。

第一巻から第三巻は、『言葉から迫る平安文学1 源氏物語』『言葉から迫る平安文学2 仮名作品』『言葉から迫る平安文学3 説話・今昔物語集』の三巻。言葉や文体、表現やコミュニケーションといった言語学的な立場から平安文学の問題を解明した著作を集めたもの。第四巻は『日本語の歴史・古典 通史・個別史・

日本語の古典』として日本語の歴史をテーマとした著書や論文を中心におさめている。第五巻・第六巻は、『オノマトペの歴史1 その種々相と史的推移・「おべんちゃら」などの語史』『オノマトペの歴史2

ちんちん千鳥のなく声は・犬は「びよ」と鳴いていた』として、オノマトペの様々な性質や史的推移、鳥の鳴き声や獣の声を写す言葉の推移を解明した論を収録。オノマトペの研究は、従来の国語学ではほとんど研究されていない未開拓の分野であったが、パイオニアともいえる著者の研究による面白い事実が満載。第七巻は『現代語の諸相1 若者言葉・ネーミング・テレビの言葉ほか』。現代の若者の使う言葉、あだ名やテレビの言葉がターゲット。第八巻は、『現代語の諸相2 言葉の探検・コミュニケーション実話』。現代語のユニークな言葉の特性の解明、中国人や医者とのコミュニケーションを綴った書やエッセイを収めている。

各巻気になったページから読み進めていただきたい。日本語や古典の研究というと、何やら難しそう、肩が凝りそうというイメージを持たれる方も多いか

もしれない。確かに硬派な研究論文も収録されているが、一般向けの読みやすい著作も多数あり、読み進めると古典や日本語学を身近に感じられるようになる著作集である。例えば第三巻の伏見稲荷大社のお参りの途中にこっそりしようとした浮気が、妻にばれて衆人環視の中とっちめられる男の話。『今昔物語集』の一話であり、男と「相手の女」の生き生きした会話の表現を、本書では丁寧かつリズムカルに解説している。その後のオチ、妻のたくましさは何度読んでも笑みがこぼれる。またこれも『今昔物語集』所収だが、洪水の際、水に流されて溺れそうになった少年が自らの知力と胆力で九死に一生を得た話も読むと勇気が湧いてくる。著者の手にかかる『今昔物語集』という古典が非常に身近に感じられるのだ。ごく一例をあげたが、ほ



『山口仲美著作集』 全8巻 / A5判・上製カバー装 / 各巻本体5,800円+税 / 風間書房 / 2020年9月完結

かにも人気の四コママンガを例にあげて説明した論文や著作集への収録にあたってQ&A方式をとり入れた章など、読み手を飽きさせない工夫が凝らされている。

内容だけではなく。章によって見出しを吹き出しにする、枠組みのデザインを変えるなど本文のデザインにも変化を付ける、2段組みの文章は上段と下段の文章の文字の大きさや行間を変えるなど、読者にとっての読みやすさを考えた構成となっている。また、写真や図版、著者自筆の鉛筆画のイラストも内容をイメージできるようにふんだんに使われていて、大きさや図版の位置など細部に至るまで、視覚的な効果も念頭に置いた仕上がり。まさに目でも楽しめる著作集となっている。

著者の一貫した読む人をいかにひきつけられるかという思いが詰まった著作集。そこには、日本語の問題は、日本語を使っている人みんなの問題であり、研究者だけではなく一般の人にも面白さを知ってもらいたいという著者の願いが込められている。

(ふるや ちあき：風間書房)

## 図書館を離れて (第50回)

— 「いく」と「ゆく」 ⑤ —

今回は戦後生まれを見ていきたい。

### 戦後生まれ (1945年～49年)

村田喜代子 (1945年生) は《長崎港へ行く》《時代が移っていく》《受け渡されていく》のように、「行く」と「いく」を意味で使い分けている。《落下してゆく》も混じていた。

金井美恵子 (1947年生) は『ページをめくる指』では《失われて行く》《現実はお話のようにはいかない》《変化させてゆく》など混在だが、小説では《散歩へ行く》《一生変わりつづけて行く》《女の人一人で生きて行く》のように漢字の「行く」だけを使っていた。伊勢英子 (1949年生) は《博物館に行けばよい》《構築していかなければ》と、「行く」「いく」の使い分けタイプだが、村田と同じく《関係を創ってゆこう》のような例もあった。萩尾望都 (1949年生) は《行くことに決めた》《日常にのみこまれてゆく》と意味により「行く」と「ゆく」を使い分けているが、《だんだん気落ちしていく》のような例も混在。

戦後間もない頃に生まれた人には、昭和の戦前 (1930～1944年頃) と同じように「混在」の傾向が見て取れる。

### 戦後生まれ (1950年～)

高村薫 (1953年生) は《棚田を行き来し》《黒ずんでゆく》《消えてゆく》のように、「行く」と「ゆく」を使い分けている。群ようこ (1954年生) は《展示会に行く》《歳をとっていく》《このままいくと》で、「行く」と「いく」の使い分け派。姫野カオルコ (1958年生) は《ロンドンに行く》《売れゆき》と、「行く」「ゆく」使い分け派だが、《掃除は行き届いている》《納得がいく》のような例も混在。

川上弘美 (1958年生まれ) は《すぐに行くのも》《後をついていく》《吸いよせられていく》で概ね「行く」「いく」派ではあるが、《会社に遊びに行き》《遊びにいく》《歩いてゆく》など、厳密に使い分けられているわけではない。

小池昌代 (1959年生) は《行きたい場所に行き着けない》《伸ばしていく》《生きていけない》で「行く」と「いく」の使い分け派。柴田よしき (1959年生) も《見物に行く》《納得がいく》で、「行く」「いく」の使い分け派。

宮部みゆき (1960年生) は《善光寺へ行こう》《遠ざかってゆきます》で、「行く」と「ゆく」使い分け派。《歩いて行った》は漢字で《歩いていきます》はひらがな、しかも《ゆきます》ではないという例もあり、必ずしも厳密ではない。小野不由美 (1960年生) は《西へと逃げて行く》《(雪を) 融かしていく》《進路を変えていく》で「行く」と「いく」だが、「……ていく」という文章例が少なく十分判断できない。矢崎存美 (1964年生) は《ホームセンターへ行かねばならない》《申し訳なきにつながっていく》で「行く」と「いく」派。

角田光代 (1967年生) は《映画館にいき》《那覇にいける》《年をとっていく》《いきかう人》と、すべてひらがなの「いく」を使用。室井佑月 (1970年生) も、《学校にいく》《(問題が) 大きくなっていく》で、すべてひらがなの「いく」。

湊かなえ (1973年生) は《ディズニーランドに行く》《夢は自分で切り拓いていくもの》のように「行く」「いく」の使い分け派。三浦しをん (1976年生) は《研究室に行く》《異世界に行く》《納得がいく》で「行く」「いく」の使い分け派。

朝吹真理子 (1984年生) は《歩いて行かねばならず》《白金に行く》《心が晴れてゆかない》《ゆっくりとみてゆくと》。「行く」「ゆく」を使い分けている。

綿矢りさ (1984年生) は《会社に行く》《移っていく》《眠りに落ちていく》で、「行く」と「いく」の使い分け派。辻堂ゆめ (1992年生) は《学校へ行く》《この世を去っていかようとしている》で、「行く」と「いく」の使い分け派。

1950年生まれ以降に増えてきた「行く」「いく」派が、1960年生まれあたりから圧倒的に多くなった。明らかに「いく」の方が主流になり、「ゆく」との間での揺れが少なくなっている。さらに、角田光代や室井佑月のように、ひらがなの「いく」だけを使う人が出てきたのも新しい流れである。

(なみき せつこ)

# ウィトゲンシュタインという人

溝上 牧子

それと知らずに読んでいるのに、本の中で何度でも出会う人がいる。それは自分の好む本が同じ傾向のものだからということもあるだろうし、興味をもっているから、すぐに見つけられるという事もあるのだろう。しかし興味のない人であったら見落とすこともあるはずだ。しかし、興味が無いのに関わらず、仕事で読む本にも度々姿を現し、ついには個人で読む趣味の本の中にも、ジャンルをまたぎ出現する人がいた。ウィトゲンシュタインという男だ。

彼の正式な名前はルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein, 1889-1951)。最初に彼の名前を目にしたのは、『オウム真理教の政治学』(大石紘一郎 著/2008年/朔北社) だったか…当時発売元になっていた絵本学会の機関誌『絵本 BOOKEND』の中だったかはっきりと覚えていない。変わった名前なので興味に関係なく、すぐ覚えた。初めてその名を目にした時には、変わった長い名前だなあとと思ったが、さほど関心をもっていなかった。しかし、その名が、読む本読む本の中に次々と登場したのである。こうも名前を目にするのはどうしたことか。彼はいったい何者か? と、気が付けば一番の気になる存在になってしまった。

様々な人に引用されたり、引き合いに出されるようなすごい人なのだと思えて認識したわけだ。

まずは手軽なところでウィキペディアの情報を読んでみて驚いた。言葉の問題でよく引き合いに出されていたので言語学者か? と思っていたら違っていた。どうやら彼は哲学者なのだった。

ウィキペディアだけでも私にとっては刺激的で衝撃的。ますます彼のことが知りたくなった。そして、顔も結構イケメンではないか! (写真があった) だがこれは重要なことではない…たぶん。

オーストリアのウィーン出身の哲学者。8人兄弟の末っ子(兄4人、姉3人)。刺激的な環境の中、血筋には才能がある人が多くいたようだ。また家

族には、うつ病や自殺傾向があり4人いる兄のうち3人が自殺し、本人も常に自殺衝動と戦っていたという。最終的な死因は自殺ではなく病死のようだが。

家庭の方針により17歳まで自宅で学び、その後、3年間学校へ通った。面白いのは彼の興味と経歴だ。航空工学、数学、哲学…そして戦争中は兵士として志願し、その後、小・中学校の教師、庭師、建築家、最後はケンブリッジ大学の哲学教授などさまざまな仕事を経験している。小・中の教師時代の彼の教育方針は、教科書よりも実践。子ども達自身が好奇心をもって見聞を広めること。熱心な教師だった。しかし、まだまだ古い時代で保守的な意見を持つ人が多く、その熱意は村の人たちや同僚にも理解してもらうことができず孤立し、狂人と噂された。そして、ついには生徒に厳しい体罰を与えたことから事態は悪化。辞表を出さざる得なくなった。

ウィキペディアは参考にはなったが、彼についての予備知識や理解力が乏しいせいなのか、理解しづらいところもある。その中から読み取った彼の人となりは初めは奇人という印象をうけた。しかし2度目に読み直したときには、天才やたぐいまれな芸術家にあるような神経質の気はあるが、とても純粋な人だったのではないかと違う印象に変わった。そしてお金に頓着しない根っからの学者に思えた。この人に関してもっと知りたいという欲求がこんなにも生まれるとは思わなかった。人はこんなふうにと人に出会うことがあるのだなあと思議な気がした。繰り返し出会う人には必然性がどこかにあるような気がする。現実世界でも本の中であつても。

これから彼の伝記を何か読んでみたい。そこから自分が何を感じるだろうか。導かれるまま川の流れにしばし身をゆだねてみよう。子どもの頃は勉強なんて好きじゃなかったけれど、年々知りたいことが増えていくことがなんだか嬉しい。

(みぞかみ まきこ:朔北社)



■謹賀新年。コロナ禍の毎日はどうとう越年して、更に感染拡大の様相のまま緊急事態宣言の再発出となりました。そんな中、知人の図書館員からの賀状には公立図書館にとって昨年は電子図書館元年となりましたね、との文言が。歓迎したいと思うものの、そもそも電子書籍の普及はどうなのでしょう。コミックなどは進んでいるとしても、一般書では分野によってばらつきがありますし、既刊書も含めてタイトルがもっと揃わないと、まだ難しいようです。

■そもそも役所のデジタル化を政府がやっと本腰を入れようというていたらくですから、公立図書館の電子化がこれからというのは、やはりという感じで

す。いずれも道はまだまだ遠くに違いありません。

■雑誌はどうでしょうか。長年購読していた月刊誌が休刊すると予告しています。電子化は頓挫したのでしょうか。誌面によっては電子化とうまく共存させながら進めているところもあります。広告頁との連動が期待したほどなかったのかもしれませんが。

■年末に机周りを整理して出てきた『科学道 100 冊 2020』（科学道 100 冊委員会／理化学研究所・編集工学研究所）。昨年 9 月に発行されたブックレット。知らない本が少なくないのですが、未読も含めて何冊かは手許の本棚から見つけました。『科学道 100 冊ジュニア』も含めて各領域の科学者たちの選書はさすがで、1 冊 1 冊がなるほどの連続です。（お）